

八幡公民館主催事業

「八幡史学館」第4回講座

平成28年9月13日

市原里づくりの会 山越国区

# 国衙市原にあり

## 上総国府の謎に迫る

**【はじめに】** 県史の謎のひとつになっている上総国府跡の所在地。政治、経済、文化の中心だった国府。幻の上総国府を歴史地理学的に、併せて発掘事例など考古学の成果を加味して、その所在地を大胆に推理した。全国的に国府の四隅に神社が祀られている事例が多い。社寺配置に注目し地図上から「上総国府」の解明を試みた。

### きょうお話しする主な内容

- なぞの溝跡発見。国衙の外郭か
- 「上総国府」解明の現状。国府とは
- 社寺配置の地図上から見えてきたもの
- 市原があやしい。有力になってきた
- 「府中」。中世能満説について
- 小径が教えてくれた国衙
- 陸の道・川の道

### 「上総国府」

上総国府。国府は律令時代の地方行政組織で中央政府の行政機関。全国六十余国に行政区が置かれ、国庁（現在の県庁）のあった所在地。国衙はさまざまな機関が集まった官庁街といったところ。その重要度によって大国、上国、中国、下国の四ランクに分かれ、上総は大国。国府域内には、中央から派遣された国司（守、介など）が政務を行う政庁、国司館、工房、正倉などが配置された。政庁は周囲を溝や塀で区画。南に門を開き、正殿を正面北よりに置き、前殿、東西に脇殿があり、コ字型の建物配置になっているのが全国共通。歴代の国司（守、介）には、中央政府で活躍した人たちや有名人が派遣されている。陸奥国で黄金を発見し、東大寺の大仏造立に大きく貢献した百

済王敬福、万葉歌人で有名な石上宅嗣、大伴家持、古代文学の更級日記の作者の父親である菅原幸標などの名が見える。

### ◆上総国府跡解明の現状

現在、上総国府の推定地に挙げられているのは、①字名に古甲(古い国府か)が残る郡本・門前地区②最近の発掘調査で古代道遺構や市内で一番深い掘っ立て柱穴跡が確認された市原地区③「府中」という名が残り府中日吉神社がある能満地区④隣接地に国府と関係の深い国分僧・尼寺跡がある村上地区一の4地区。その他に惣社説もあったが、国分寺台の区画整理事業に伴う発掘調査で存在が否定された。最近では「府中」の名が残る能満地区は、中世の国府(守護所)があったのではと考古学の学者や研究者の間で定説になりつつある。

### ◆市原があやしい。明治初頭の地割図がヒント

市原地区の社寺配置に注目。阿須波神社—市原八幡神社—日笠宮神社の配置から相関性がうかがえる。南東方向には神社はないが、近くに天王崎の地名があることから、「天王様(牛頭天王・八坂神社)」を想定。天王様は、市原八幡神社境内地に勧請されている。これらを結ぶと、きれいな四角形を描いた。市原地区は、これらの神社に守護されていることが分かる。国分寺創建瓦よりも古い瓦が出た光善寺(光善寺廃寺遺跡)にも注目。国分寺と、古瓦が出土した千草山廃寺遺跡(市原中、武道館)を線で結ぶと二等辺三角形になり、なにか計画性が感じられる。

### ◆社寺配置から分かったこと。上総国府私論

地図上から浮かび上がった上総国府。市原地区の阿須波神社と藤井地区にあった大官大権現のライン。光善寺と千草山廃寺を結ぶラインが上総国府(国衙)を解明するカギ。大胆に推理して「上総国府」は、時代、時代で移動した。上総は神門古墳群や稲荷台一号墳の王賜銘鉄剣にみられるように、中央政権にとって重要拠点だった。常に北(東北地方)をにらみ、戦略的に拠点が構築された。北方攻略の前線基地から、東北平定が進むと兵たん基地としての任務を担った。こうした点から国府域は、重要施設が置かれた市原台地を有効利用。稲荷台遺跡の山田橋・藤井地区、郡本、門前、台地北方の市原地区で国衙域が移動した。中世には「府中日吉神社」がある能満地区に移った。なお、市原台地上には、世にいう「国府5町域」は取れない。結界として約5町域あったのでは。地図上からは、そう読み取れる。国衙移動は、741年の「国分寺建立の詔」がきっかけとみる。国分僧・尼寺建設と新たな

国づくり（国衙）が同時並行で行われたのではないか。741年の安房国の上総国への併合が物語る。安房が再び独立する757年ごろには、国分僧・尾寺の整備、古甲（郡本・門前地区）からの移動がなされたとみている。今年（平成28年）3月の溝跡遺構の発見が、上総国府（国衙）解明の手がかりを示してくれた。幻の上総国府・国衙は市原にあった。今後、市原地区での発掘調査など積極的な考古学の研究成果が待たれる。

# 地元学「柳楯神事と上総国府」

～飯香岡八幡宮から考える～

平成30年1月27日

八幡南町会総会・郷土史講座

## (一) はじめに

きょうは、八幡地域の氏神で「宝物」でもある飯香岡八幡宮に関係したお話をします。飯香岡八幡宮は国府総社で、秋季例大祭には「柳楯神事」が欠かせません。柳楯が届かなければ祭事、神輿の渡御ができない。600年以上続いているとされている柳楯神事とはどのような性質のものか。幻の上総国府とは。飯香岡八幡宮を通じて、八幡・五所地区と市原地区とのつながりを探ります。市原市の歴史や「まつり」についてもふれます。

## (二) 「市原」地名の由来と「まつり」について

●「市原」の地名は、すでに奈良時代には存在していました。市原という名称は、通説ではイチイの木からといわれていますが、私は「市場」が開かれる大きな広場（原）が存在したと考えています。飯香岡八幡宮の元宮といわれる市原八幡神社は市原市市原1番地に建っています。市原市の1丁目1番地です。神社近くの門前地区には「人市場（一日市場）」という字名が残っています。一日市場は、一（いち）の日に国中（上総国）で一番早く開かれた市。平安時代の百科事典「和妙抄（わみょうよう）」に「上総国府、市原郡に在り…」という記載があり、市原地区に「国府」の存在がうかがえます。ちなみに、下総国府は市川市の国府台地区にありました。市川の地名は川のそばに市が立ったから「市川」の名前がつけました。

●市原市の歴史。市原市は旧石器時代以前から、古代、中世、近世、現代に至るまで各時代の歴史遺産が多く残されています。縄文時代の貝塚遺跡群、古墳時代の大型古墳群は全国的に知られています。最近では、「チバニアン（千葉時代）」が話題です。77万年～12万6000年前の田淵地区にある地層で地球の磁場が逆転したことがわかりました。近い将来、「チバニアン」の名前が世界各国の教科書や書物に載ることでしょう。古墳時代には、卑弥呼の時代にあたる3世紀末の「神戸（ごうど）古墳群」。東日本では最古の古墳です。「稲荷台1号墳」からは、国宝級の「王賜銘鉄剣」が出土しています。埼玉県の稲荷山古墳の鉄剣銘文より古く、日本で一番古い文字です。奈良時代に建立された国分寺（僧寺）は全国最大級、国分尼寺は最大規模を誇っています。市原市は歴史・文化遺産が多い魅力にあふれた街。戦前は八幡地区に、市原の郡役所が置かれ、政治・行政、経済、文化の中心地として栄えました。また、遠浅の八幡浦海岸は海水浴や潮干狩り客などでにぎわいました。

●まつりについて。祭りは、「奉る」、「祀る」から派生。まつりから「マチ」ともいわれています。ハレの日を、ひたすら「待つ」。エネルギーを蓄えて、祭り本番までワクワクする。私たちの日常生活は気（ケ）の連続です。ケが続けば気が枯れる（ケガレル）。このために、ハレの日を設けて非日常の世界を演出しました。正月に始まり、春祭り、夏祭り、秋祭り、1年のサイクルの中に組み入れました。飯香岡八幡宮の祭礼もそうですが、神社の祭りには「決まり」があります。「物忌み」、「依り代」、「共食い（神と）・直会」の三要素です。祭りは①神迎え（宵マチ）②おもてなし（本番・神輿など神様と人が共演）③神送り（後の祭り・どんどん焼き）の順に進められます。古代に神社はなく、社（やしろ）はありませんでした。まつり（祀り）の際には臨時の社が造られました。天空から神を迎え、祭儀の後に焼いて神様をお送りしました。だから、後に残らないことから「後のまつり」といいます。屋代（やしろ）さんという苗字は、古代のまつりごとの名残です。

### (五) 地元を見直そう。魅力ある街づくり (まとめに代えて)

これまで述べてきたように、市原地区と五所・八幡地区は深いつながりがあり、飯香岡八幡宮を中心としたネットワークが築かれています。常々思っていることがあります。市原市北部の八幡地域は歴史的に魅力があふれた街です。地域のよりどころである飯香岡八幡宮を活かした街づくりができないものか。市原市の観光資源は南部の養老溪谷や小湊鉄道ばかりではないと思っています。知恵と工夫次第では、成田山のような多くの人々が訪れる門前町になることが可能だと思っています。八幡宮は地域の誇りです。本殿を含め拝殿、宝物は国や県、市の文化財に多く指定されています。神が宿る境内は、市原市五井出身の直木賞作家・立野信之氏の自伝的小説「流れ」の舞台にもなりました。南町周辺の榎の生け垣(小径)は、かつての漁師町を思い出させます。こうした資源を活かせないものか。観光資源として、駅より近いというのが何よりも強み。歴史散策を楽しみ、“名物食”に舌鼓をうてる街になれるはずです。街づくりには、ストーリー(物語性)、動機づけ、仕掛けが必須です。「温故知新」という言葉があります。古きものを学び、新しきを生み出す。「やわた物語」はどうでしょうか。まずは実践です。みなさんで創ってみましょう。“創作”には、市民、地域住民を中心に社会全体で価値(八幡の魅力)を共有することが何よりも重要になってきます。きょうは、郷土の素晴らしさや歴史を語る場を与えてくれて、ありがとうございました。

市原里づくりの会・山越国臣



完成したばかりの柳桶。まずは司家の床の間に安置される



五所へ向け、中道(古代道)を行く柳桶

### (三) 上総国府について

国府は、奈良・平安の律令時代に全国に約60カ所に置かれました。市原市に国分寺・尼寺があることから、上総国府が市内にあったことは確実です。国府は国の行政機関が集積したエリア。県庁所在地（県都）といったところで、国衙（官庁街）、国庁（県庁）の三つに細分化されます。国は大国、上国、中国、下国の四ランクに分けられ、上総国は数少ない大国の一つでした。市原市内では、市原、郡本・門前、能満、村上の四地区が推定地として挙げられています。これまでの発掘、確認調査などで「市原」、「郡本・門前」が有力になっています。柳橋神事に関連しますが、朝廷から派遣された役人（国司）の重要任務の一つが、国の有力な神社を参ることでした。ちなみに中央からは守・介・掾・目の四等官が政務にあたりました。市原市民は、国分寺や尼寺がある市役所周辺が古代の中心地だと思っている方が多いと思います。だが、国分寺・尼寺は「人臭のしない片田舎に造りなさい」という詔（みことのり）があり、全国の国分僧寺・尼寺は国府のはずれ（郊外）に建てられました。市原台地（市原、郡本・門前地区）が上総国の中心だったのです。

### (四) 市原の「柳橋神事」

●柳橋神事は、国府八幡宮で総社を兼ねたとされる飯香岡八幡宮に伝わる秋季例大祭にまつわる特殊神事です。千葉県無形民俗文化財に指定されています。600年以上前の室町時代中期から続いているのではないかと、史料から推測できます。大祭前日に、市原地区で調製された柳橋を二日間かけて五所地区を經由して飯香岡八幡宮の神前（一宮の神輿前）に奉てん。柳は神降臨の霊木、柳橋は八幡宮が武神から「橋」になったのでしょう。古代のミコシの原型だともいわれています。この柳橋神事の中に、古代の「祀り」が凝縮されていると思います。市原地区（光善寺）での、神迎いの儀式。出ぶる舞いといわれる神前での共食い。神と人が共に喜びを分かち合う。祭主は町会長が努めます。その後、白丁姿の氏子に担がれた柳橋が五所地区（町民館）まで届けられます。翌朝、五所地区の氏子が柳橋を引き継ぎ、カルサンの先導のもと八幡宮に向かう。この一連の神事は、「静」から「動」へ変化し、エネルギー全開に向けての胎動が感じられます。ちなみに、あるものが神社に届かなければ祭事が始まらないという事例は全国に多い。館山市の鶴ヶ谷八幡宮の場合。安房国の総社で、秋季例大祭「やわたんまち」（千葉県無形民俗文化指定文化財）は、安房地域最大の祭りです。この祭りは、前日（宵宮）に南房総市（旧三芳村）の元八幡神社の御井戸からくみ上げた清水が届かなければ、祭りができません。その夜、館山市や近隣の南房総市にある11社から神輿が集結し、「六所祭」と呼ばれる祭事が執り行われます。ちなみに、鶴ヶ谷八幡宮の例大祭の正式名称は「安房国司祭」です。八幡社の総元締め・大分県宇佐市にある「宇佐神宮」では、中津市にある薦神社境内の三角池で採集され、調製した「薦枕」が届かなければ祭りができません。

●柳橋神事は何を意味するのか。私なりに解釈しました。律令の時代、国司の重要任務は国内の有力神社を参る（祀る）をことでした。交通不便の時代で苦勞が多かった。解消しようと、平安時代の末期に諸国の国庁近くに「六所宮」が設けられました。各地の神社から神を勧請、国司の重要神事として「六所祭」が行われるようになりました。その後、中世に総社が生まれました。「府中」という名称も中世の名残です。飯香岡八幡宮の場合も、「柳橋神事」は上総国府と関連性があります。大祭に先立って上総国府があったとされる市原地区から、国司の名代として幣はく（御幣）を奉てんする。柳橋は柳を依り代として神（幣束）を迎え市原、五所、八幡地区の氏子が協力して八幡宮まで届ける神事だと思います。ちなみに、市原地区の柳橋司家の森家は屋号を「ごへいどん」といいます。まさに「上総国の国司祭」で、飯香岡八幡宮が国府総社の証しです。また、八幡宮の裏手にある奥宮と称する「六所神御影神社」の存在が重要になります。だからこそ飯香岡八幡宮が「国府総社」を名乗れるのです。みなさんは知っていましたか。六所神も市原台地から勧請されたのでしょうか。全国の総社周辺には「六所神社」が存在しています。飯香岡八幡宮は、室町時代の中期ごろに現在地に市原台地から遷宮されたのではないのでしょうか。柳橋は水戸黄門の「印籠」のような印（しるし）かもしれません。

## 柳楯神事（県指定無形民俗文化財）

市原市史（別巻）より

柳楯神事は、飯香岡八幡宮の大祭（旧暦八月十五日）の特殊神事で、柳楯が八幡宮に到着しないと祭儀の開始は勿論のこと、神輿の渡御もできない。柳は神降臨のため霊木とされているが、八幡宮は武神であるため、楯の形に柳で作った幣帛であると解されている。

柳楯神事の最古の記録は、足利義満が飯香岡八幡宮に神輿を四基奉納したときの祭礼儀式にみられる。

柳楯は祭礼の前日、市原区の柳楯司家（二軒あり）で、一年交替で調整される。先ず、付近の川辺に自生する柳の小枝を切り取り二十五本選び、大体一三五センチぐらいに切り揃え、先端の葉の部分を残して皮を剥ぐ。これを縦に並べて横に五段にわけて縄であみ、なわであんだ上には、二つ割にした青竹を両面から合わせ、なわで五ヶ所ずつ結びつける。調整された柳楯は、中央に青竹を通して白丁姿の年番の人がかつぎ、前後を司家の人が守って市原区の町会長宅へ向かう。この市原区は、もとは市原郡市原村字市原といい、平安時代の和妙抄に記載の市原郷に該当すると考えられる古い部落である。町会長宅では床間に祀られ、出振舞いがあったから、市原八幡神社に報告のため立寄り、次いで道中安全を祈って阿須波神社に参り、五所に向かう。市原八幡神社の地は、もと飯香岡八幡宮の鎮座地であり、阿須波神社は、道中安全の神としても知られる。町会長宅からは、市原八幡神社の氏子総代三人が後ろに従うが、五所部落からは、五所の柳楯御三家の人たちが村境まで出て迎える。柳楯は五所の年番家に引継がれ、ここで一夜を過ごす。五所も飯香岡八幡宮の旧地という。五所への道は、古代の采里制遺構である。

祭礼の朝を迎えると、五所から警固、宰領、カルサン（警固の者、独身者が順番にあたる）、町役が集まり、これらの人達に護られて八幡宮に向かう。柳楯を迎えるため、飯香岡八幡宮の氏子総代数人と二人のカルサンが、五所と八幡部落の境を流れる北川のあたりで待つ。ここで柳楯の一行に合流すると、迎いのカルサンが先導する。柳楯が八幡宮に近づくと屋台のはやしがなりはじめ、社前に到着すると社殿の太鼓が重々しく打たれる。柳楯は神主によって本殿の一の宮の神輿の前に祀られ、ここで初めて祭典が挙行される。祭儀が済むと、柳楯は五基の神輿の先頭に位置して町内を一巡し、町内の渡御を終えると本殿に安置され、翌年一月十四日のドンドン焼のときに社前で焼かれる。

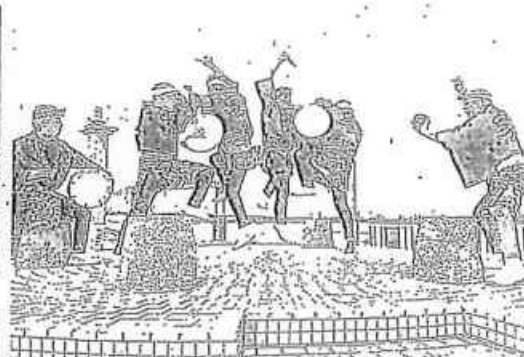
# 「ちば文化資産」に11件

県は、次世代に残したいと思う「ちば文化資産」として、伝統行事や史跡、建築、景観などから11件を選んだ。伝統的なものに限らず、千葉の文化的魅力を発信する「モノ」や「コト」を県内全域から幅広く選定した。

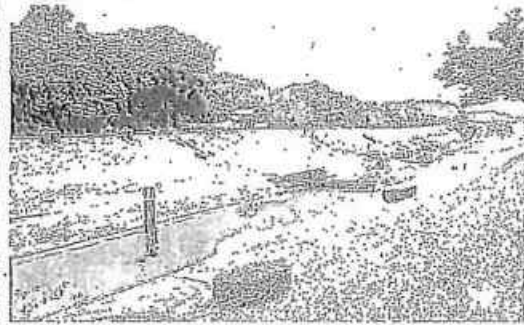
## 文化的魅力を発信 県が選定

県は2020年東京五輪「魅力」を国内外に発信する好・パラインピックを「文化」機と位置づける。昨年10月の「参典」とも捉え、千葉の12月に候補を募集し、有識

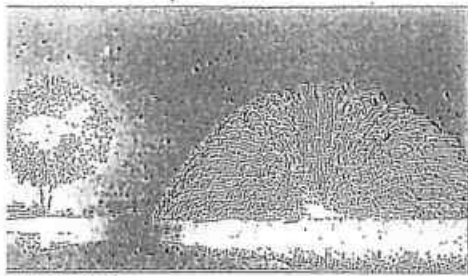
者でつくる選考委員会が211件の候補を決定。今年4月6日に県民投票を実施し、6754票の投票結果と選考委員の意見などを踏まえて選定した。



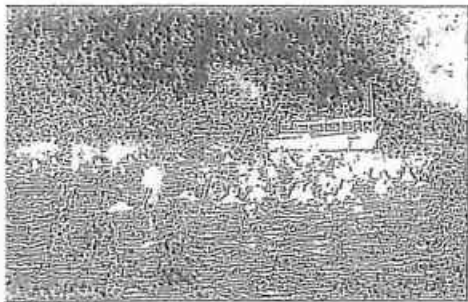
銚子はね太鼓



利根運河



手賀沼花火大会



白浜海女まつり



上総十二社まつり=いずれも県提供

銚子はね太鼓（銚子市）は江戸時代から伝わる祭り太鼓で、2人の打ち手が太鼓を担ぎ上げ、打って跳ね回る。利根運河（野田市、柏市、流山市）はオランダ人技師の計画により明治28（1895）年に建設された日本初の西洋式運河。このほか、手賀沼花火大会（柏市、我孫子市）▽白浜海女まつり（南房総市）▽上総十二社まつり（いすみ市、一宮町）も投票が多かったという。

（寺崎宣子）

また、善張新都心（千葉市）▽ぼっち（落花生の野積み）の風景（八街市）▽東京湾アクアラインと海ほたるの景観（木更津市）など近現代の景観なども選定。勝浦タンメン（勝浦市）▽クジラのタレ（安房地域）▽竹岡式ラーメン（富津市）▽太巻き寿司（県内全域）▽なめろう（沿岸地域）といった「当地グルメ」も選ばれた。

「ちば文化資産」の一覧は県のホームページに掲載している。

